

次に、教育と研究は分離されるだろうか？ 今のところ、教育者と研究者の分離を主張する案はほとんど見られない。しかし、最終的な落ち着き場所としては、分離される方向に行くのではないかと思う。本質的な理由は、研究の細分化により、研究と教育の距離が非常にかけ離れてしまったので、研究者に教育をゆだねるのは不適當だからである。実際、研究者による教育が崩壊していることは既に述べた。また、外面的にも、大学ないしは研究機関のスタッフを、教育労務者と研究労務者に分けて管理した方が、管理しやすいことは言うまでもない。時々、高度な教育は研究者が行うべきであるという議論があるが、以上の議論に基づけば、見当はずれな議論であることは言うまでもない。細分化された知識だけでは、教育の体をなさない。

最終的には、教育労務者は教育、研究労務者は研究の目的と責任が問われる体制となるが、その際、研究はプロジェクト中心となり、大学の自治や教育の傘の下でのようなわけには行かないであろう。この分離が、学部内での分業となるか、学部と付置研の分業となるか、大学と（大学外の）研究所の分業という形になるかは、不明である。「研究大学」なる言葉を時々耳にするが、以上述べてきたような日本の（国立）大学の構造を維持しようという意図の下に言われているのであるならば、それは問題の解決ではなく、問題の持続に過ぎないことは言うまでもない。

5.6 学者復活の必要性

以上のようなわけで、教育と研究は機能的に分離されていくと思われるがそれだけでよいであろうか。やはり、狭い意味の教育者と断片的な研究者以外に学者が必要であると考え。なぜなら、断片的な研究成果が断

片のままでは、学問体系になっていないし、教育することもできない。断片的な研究成果を積分して、体系化する人が必要である。この作業がないと、研究自体も見通しを欠くことになり、正しい方向性を失うであろう。この体系化を行い、その知識を保持している人を学者というならば、高度な教育は学者が行うべきことは、明らかだろう。高度な教育の場において、断片的な研究成果を総合して行く教育者が学者だといってもよい。

5.7 終わりに

以上の議論の原型はかなり古く、私が東京大学の大学院生だったころの指導教官の松野太郎先生との議論に遡る。その時の議論のポイントは、研究者と学者は違うということだった。しかし、その頃は、日本では大学の教官は偉かったので、外部評価など考えられず、研究労務者という言葉も思いつかなかった。

多くの方は本稿を読んで、ほぼ当たり前のことを言っているだけで、本稿で言う「労務管理基準」を自分たちに少しでも有利にする議論をしなければ意味がないと思われるかもしれない。しかし、ほとんどの議論と改革が、研究や教育や大学の目的を問わないまま、大学の合併や任期制といった意義不明の改革案や技術論に流れている。そこで、本稿では歴史的な観点から大きな枠組でものを見てみた。本稿では「学者の復活」以外、暗い分析が多く、積極的な提案をしていない。その理由は紙数の関係もあるが、大学改革はこれをまともに考えると、国家のグランドデザインと関係してきて、本シンポジウムの範囲を大幅に越えざるを得ないからである。

訂正

「本誌」50巻12号に以下の誤りがありました。お詫びして訂正いたします

巻号	頁	行	誤	正
50.12	目次	下から8	松田佳人	松田佳久
	907	右下から4	馬淵和雄	馬淵和雄
	907	左下から9	磯部英彦	磯部英彦
	(iii)	左上から3	第3回	第14回
	(iii)	左上から4	第2回	第5回